

やまとことばの世界観と音韻の論理

2013年6月17日

JOMON^{縄文}あかみい、山田^{まなぢ}学^{まなぢ} ©
www.jomaca.join-us.jp

〔目次〕やまとことばと人権思想 1 内容言語学と語分類 2 合成・準合成・接続と〈無語〉 3
 問題設定と体詞など 4 動詞活用 6 静詞 8 動辞など 9 静辞など 13 関係詞など 15 動詞部
 など 17 〈然意予感〉 20 〈連綿語〉 21 和歌の世界観 23 〔文献〕 28

やまとことばと人権思想

本論において、日本語のうち外来語を除いた部分を、やまとことばと呼びます。

日本民族が現代まで、まづ弥生時代に農業などを輸入・改善し、その後、エリート層が中国語やドイツ語や英語などを学ぶにつれ、やまとことばもそれなりに変化してゐます。本論は、現代のやまとことばが縄文時代からのやまとことばの全貌となるべくつながりやすいやうにする試みです。

さて、やまとことばに^{こゝろたま}言霊思想があるのは、日本列島の気候のうちにあり、やまとことばにおいて、〈念と呼吸と発音生理と音韻体系の過程〉を大切にしたり、といふことでありませう。それが江戸時代の俳句や歌舞伎などにも結晶してゐませう。しかし、幕末以降、西欧の音楽や医療などとの比較にさらされ、さらに戦後、新かなづかひの導入により、やまとことばの伝統を反省しにくくなつてゐます。西欧民族ははじめ世界の諸民族との比較において、やまとことばの伝統の長所短所を反省し自覚し、未来のやまとことばを創造していく。これが日本民族としての^{こゝろたま}人権思想でもありませう。

民族の生理は、その民族の〈世界観と言語規範といふ認識〉の生理です。

本論は、やまとことばの世界観を表す、やまとことばの基本語体系研究への入門です。とともに、やまとことばの原始において、概念と音韻が発達しあつた過程をも、なるべく予感・予想してみました。

やまとことばの音韻体系には、音行^{キヤウ}と音段があります。音行は、本論の認識にもとづく独自の順序にて、な行・ま行・ら行・さ行・ざ行・た行・だ行・か行・が行・は行・ば行・ば行・あ行・や行・わ行です。音段は、あ段・い段・う段・え段・お段です。音段と音行の区別は、母音と子音の区別とは限りません。音段は母音 a-i-u-e-o であるが、同じ音行において、やまとことばは独得の子音の変化もあります。たとへば、[a-chi-tsu-te-io]。

動詞の活用が典型的ですが、動詞の活用に限らず、やまとことばにおいて、いはば同行交段があります。すなはち、音行が同じのまま音段が交替することが多いです。さういふ音韻体系です。同行交段には内容の変化をともしなふものと内容の変化をともしなはないものがあります。

なほ、漢字は外来語であり、やまとことばでありません。日本民族は、漢民族から漢字を輸入し、ひらがなとカタカナといふ文字を発明しました。やまとことばの音韻の、旧かな文字による表現を、発達させました。漢字の、日本語における音読みは、各地・各時代の漢字の音声言語を、やまとことばの音韻体系にてまねた音声言語です。漢民族の音韻体系とは異なります。

内容言語学と語分類

文章・文・節・句・語を分類するため、主題と説明といふ機能に着目することがあります。といふより、今までの「文法」はほとんど、かういふいはば機能言語学でした。

一方、たとへば翻訳機械を設計するためには、語・句・節・文・文章の意味内容に着目することが重要です。いはば内容言語学が重要です。が、日本社会において、鈴木 脛 (1764 ~ 1837) → 時枝誠記 (1900 ~ 1967) → 三浦 じゅん (1911 ~ 1989) らが、この内容言語学を発達させつつあります。本論は、日本社会において内容言語学を継承し発達させ、〈やまとことばの世界観と音韻の論理〉を整理する試みです。

言語を含む表現といふものは、対象を認識して表現してあります。語・句・節・文・文章から認識の対象にさかのぼる学問が、内容言語学です。

主題と説明といふ機能に着目すると、民族や宗教や国家などの違いもあり、なかなか統一できません。一方、言語から認識の対象にさかのぼると、世界の統一性ゆゑ、語は以下の六つのみに分類されると、考へられます。本論において用ゐる記号「ど」「せ」「カ」「ド」「セ」「タ」とともに示します。

ど || 動辞 || 体内の動的存在を反映する語

せ || 静辞 || 体内の静的存在を反映する語

以下、体外の存在や認識したいといふ存在について、

カ || 関係詞 || 関係を反映する語

ド || 動詞 || 動的属性を反映する語

セ || 静詞 || 静的属性を反映する語

タ || 体詞 || 実体を反映する語

世界は体内と体外と認識したいの統一です。

体内を反映する語が、主体語 || 辞 (動辞・静辞) です。

体外や認識したいを反映する語が、客体語 || 詞 (関係詞・動詞・静詞・体詞) です。

辞 (動辞・静辞) と詞 (関係詞・動詞・静詞・体詞) といふ語分類は、内容言語学の伝統と創造として、わたくしが始めたものです。

しかも、良い記号の工夫が学問を推進するといふ、物理学などの経験に学び、記号「ど」「せ」と「カ」「ド」「セ」「タ」を導入しました。

この語分類と記号になじむには、多少時間がかかるでせうが、結局、内容言語学の伝統と創造としてわかりやすいと、納得していただける。そのやうにわたくしは信じてをります。

翻訳機械の設計は簡単でありませんが、設計の不備が如実に結果として実証されてしまふ工学とつきあつてみると、「対象↓認識（概念）↓表現（言語）」といふ過程のうち、「対象と言語」をなるべく直結する学問（世界学・認識学・言語学）の努力をまづ人間の側にしておくことが、将来の本格的な設計のための鍵だ、と気づかされます。

対象（世界）の論理から、まづはやまとことばの全貌を分類し直してみると、どういふことになるか。言語学・国語学の諸先生の貴重な研究に学びつつ、現代社会の欲求の先端から、あへて分類再編に挑む、初の試みです。

合成・準合成・接続と〈無語〉

世界（体内と体外と認識したい）への対応としてのやまとことばの音声言語について、とくに概念と音韻の生理過程について研究してまゐります。

なほ、やまとことばの文字言語については、たとへば、「上る」「登る」「昇る」はいづれも「のぼる」と訓読みするやまとことばであり、やまとことばの漢字とかなによる文字言語です。ただし、外来の漢字「上」「登」「昇」により具体的な意味も区別してをり、やまとことばと漢語の二重文字言語とも言へませう。

本論において、詞（≡客体語）として内容が自立してゐない詞の部分を詞部と呼びます。語（詞または辞）と詞部から詞が合成または準合成されます。（準合成については後述。）詞部の記号は詞の記号に（ ）を付します。

（カ）≡関係詞部 （ド）≡動詞部 （セ）≡静詞部 （タ）≡体詞部
語が接続され句が成ります。句が接続され節が成ります。節が接続され文が成ります。文が接続され文章が成ります。

句における語の接続が合成に近づき全体が一語となることがあります。この場合の合成に近づいた接続を準合成と呼びます。

合成を「*」、準合成を「x」、接続を「+」と記号します。
合成・準合成・接続において内容は変化しないとともに形式は変化することがあります。これを内同形変と呼びます。内同形変のうち流声・強声・短縮といふものがあります。

流声 ≡ 声が流れるやうに音韻を変へる（「い」「う」「つ」「ん」の音便を含む）

強声 ≡ その部分を確認しやすくするため声を強める

短縮 ≡ よく表現する音声言語を短縮する

語句分析において流声・強声・短縮といふ内同形変を「↑」と記号します。これに対し語句の内容が変化することを「△」「▽」と記号します。たとへば「この流れに沿つて」の「流れ」は動詞「流る」の活用「流る」が体詞に転化した、動詞の体詞化、あるいは動詞的体詞であり、「^下タながる^れ（流）」と示します。

活用や合成において、かなの右側に^レを付したのは音韻が消えることを示します。例「^下みる^レ（見）^上とます^レ」（^セからし^レ）（^辛）*（^カ）や^レ」

合成における音韻変化について、まま合成・活用合成・交段合成・浸透合成といふも

のがあります。

まま合成⇨音韻変化のないそのまま合成 例「ドもとづく(基)^{強声}↑もとつく⇨タもと*ドつく」

活用合成⇨前部が活用して合成する(活用を右側に示す) 例「ドウごかす(動)⇨ドウごか*_(下)す」

交段合成⇨前部の末が同行交段して合成する(どの段に交段するかを*の右側に示す) 例「ドおとる(劣)⇨ドおつ(落)*_(下)る」

浸透合成⇨前部の末の音行に後部の頭の音段が浸透して合成する(*の右側に¹を付す) 例「ドつかふ(使)⇨ドつく*_(下)あふ」

なほ、合成の生成史から言ふと、合成の前部に動詞原形(いはゆる「終止形」)を示すことは実際的でないのですが、原形により語彙を把握する習慣を優先し、このやうな表示とします。詳しくは後述します。

さて、時枝誠記はやまとことばに「零記号」といふものを導入しました。(文献1(上) p273(参照) 本論なりに説明し直すと(言語表現過程において動辞などの概念はあるとともに語は無い)といふいはば(無語)の過程がありその過程を明示する記号を導入した。本論においては(無語記号)と呼びませう。時枝誠記・三浦つとむ以後の研究により、動辞の(無語)の基本は四種類であることがわかりました。本論においてそれら動辞の(無語記号)を「○」「―」「…」といたします。

たとへば命令文「立て」は「^{命令}立^{意向}」です。世界の未来の相手の動的属性を「立て」と表し、世界の現在の相手に命令する言語表現者の体内の動的存在「○」があります。なほ、従来、「見よ」の「よ」を「活用語尾」に属するとしてきましたが、正しくは命令文「^{命令}見^{意向}」です。

制止文「行くな」は「^{命令}行^{意向}」です。世界の未来の相手の動的属性を「行く」と表し、世界の現在において相手に体内の動的存在「―」が成立するのを制止する言語表現者の体内の動的存在を「な」と表します。

文「日本の思想はまた流転する」の末尾は「^{命令}下^{意向}流転^{意向}」です。世界の未来の日本の思想の動的属性を「流転する」と表し、客体についてさう判断する現在の言語表現者の体内の動的存在「…」があります。

文「あれはきつねで、これはたぬき」の末尾は「^{命令}タ^{意向}たぬき^{意向}」です。注目する実体を「たぬき」と表し、それについてさう判断する言語表現者の体内の動的存在「―」があります。

問題設定と体詞など

やまとことばの原始人はどういふ生活をしてゐたか。生理にもとづき認識と表現をどう発達させたか。体詞・静詞・動詞・関係詞・静辞・動辞、これらをしていかにどう発達させていったか。とくに動詞語彙をどう発達させたか。おそらく内容は具体的から抽象的へ形式は一音節・二音節から。動的属性概念と動詞音韻のどういふ有益さがあり活用

形といふものを発達させたか。活用における同行交段の有益さは何か。逆に上一段活用や現代は下一段活用も発達させ（「るれ」部以外）同行交段をやめた動詞もあるのはなぜか。どういふ動的属性概念と動詞音韻ゆゑいくつかの活用型があるか。ら行な行か行さ行の変格活用はなぜあるか。〈世界の必然性から人の決意性へ〉といふ動的属性概念が動詞音韻ないし活用型に反映してはゐないか。静詞活用はどう発達したか。（古代）静詞活用がさ行か行にわたるのはなぜか。動詞型の動辞や静詞型の動辞はどう発達したか。世界認識と人間関係においてどういふ有益さがありやまとことばの動辞や静辞はつまり体内の反映は発達したか。

以上、まづは内容言語学なりの問題設定です。

一方、体内と呼吸と発音生理についてヨガの沖 正弘師とその著（文献22、23、24など）に学び続けてゐますわたくしはかうも問題設定します。

地球表面において物体は落下する。人間の直立二足歩行する身（骨格と筋肉）において鉛直と水平の意識が大切である。背骨と鼻骨を鉛直にする意識と左右の骨盤および左右の目を水平にする意識。これが体内の動的存在的概念たる動辞の〈無語〉「○」「―」「∴」「―」と関係する。動辞「べし」とも関係する。健康平和生活にとり徹頭徹尾必要なのは文字言語でもなく音声言語でもなく健康平和な呼吸である。そして次に「あくおくんく」といふ発声である。やまとことばの動辞・静辞・動詞・静詞の音韻とくに活用などの同行交段はヨガの説く健康平和性からどう評価されるか。（沖ヨガに学んだわたくしなりの認識の表現は文献26）

ここでやまとことばの基本体詞などについて少しまとめます。

タミ（身） タミミ（耳） 東洋医学などにおいても、み（身）の集約がみみ（耳）であるとされてゐる。 タムね（胸）タタミ（身）*タマカね（根） タメ（目）^{下あむ}（浴）
 タあめ（雨） タあめ（天） タうみ（海）^{強調}タタミ（水） タみづ（水）^{強声}↑みつタミ
 （水）*タつ ドみつ（満）
 タち（血） タちち（乳） タて（手） カゆくてタドゆく（行）*タマカて（手） ドひつ
 （漬） ドひたす（浸）^たタドひつ（漬）*トす タひと（人） カひと（一） セひとし（等）
 カひた（直）

タはな（鼻） ドはぬ（跳・撥） ドはなす（話）^あタドはぬ*トす タいき（息） ドいく
 （生） タくち（口） タこと（言） タこと（事） カことわり（理）^{タこと}タこと（事）*トマカわ
 り（割） タかた（象・形・型） ドかたる（語）^{タかた}タかた（象・形）*トる タかほ（顔）
 ドかふ（交） カかは（側） タかは（川） タかは（皮） タけ（毛）
 タめ（芽） め（目）のやう世界へ開かれる。 タはな（花） はな（鼻）のやう体外
 と何かをやりとり。 タミ（実） 食べてみ（身）になる。

なほ、やまとことばの音韻は上向きのものを「をく」とし下向きのものを「おく」としてゐました。「をさなし（幼）」「をとこ（男）」「をとめ（乙女）」「をんな（女）」「をどる（跳・躍・踊）」などと「おゆ（老）」「おきな（翁）」「おうな（媪）」「おとろふ（衰）」「おづ（怖・懼）」「おどろく（驚）」「おく（置）」「おつ（落）」「おとる（劣）」など。新かなのやうに

「をく」をすべて「おく」としてしまつては、やまとことばの人生観・自然観や自然落下の大地に対する感覚の封印でせう。(文献12p127～8参照)

動詞活用

もとより、前節にて設定した問題は長い時間をかけて解決していくべき問題です。本論は入門編です。

まづ、やまとことばの音韻の象徴として、動詞活用について検討させよう。

やまとことばの原始から未来への発達(伝統と創造)を考へる立場から、平安時代の動詞活用をひとつの標準といたします。

ところで、もちろん、先達の研究を尊敬しますが、従来の「体言」「連体形」「用言」「連用形」といふ用語は、未だ論理的な整理が充分でない概念の語です。

また、活用形といふものを考へるには、動詞のみでなく静詞や動辞の活用も考慮します。さらに、語の形式分類でない内容分類の内容言語学として、かう提案いたします。たとへば「ま(目)のあたり」は、体詞の原形「め(目)」があり、それが次語に連続する連続形「め(目)へ活用すると、考へてもよいのではないでせうか。

これらも考慮し、六つの活用形を以下のやうに規定いたします。

原形Ⅱもとの形式(↑「終止形」)

連続形Ⅱ次語に連続する形式(↑「連体形」)

小止形Ⅱその語にて少し止める形式(↑「連用形」)

未然形Ⅱ語の内容が未然(まだ了へてゐない状態)であるといふ内容を示す形式

命令形Ⅱ命令動辞の(無語)に接続するかまたはその語が命令動辞ともなる形式

已然形Ⅱ語の内容が已然(すでに了へてゐる状態)であるといふ内容を示す形式

原形から連続形・小止形へは、呼吸と音韻のため、内容の変化をとまはない形式のみの変化です。原形から未然形・已然形へは、語の内容に未然か已然かといふ内容が浸透する形式の変化です。原形から命令形へは、語が動詞なら、内容の変化をとまはない形式のみの変化です。語が動辞なら、語の内容に命令といふ内容を加へる形式の変化です。(命令形のある動辞は「あり・なり・たり(とあり)・たり(てあり)・ぬ・つ・ます」)

やまとことばの生成史としては、たとへば、体詞連続形「ま(目)」がまづあり、それに強調関係詞「い」の合成した「まい」の短縮として体詞原形「め(目)」が成立したやうです。動詞未然形「さか(咲)」がまづあり、それに強調関係詞「い」の合成した「さかい」の短縮として動詞已然形「さけ(咲)」が成立したやうです。(文献15参照)

しかし、生成史とは別に、平安時代の動詞活用を標準として、あらゆる活用を整理し直す、といふことです。

古代動詞活用型には、本論の認識にもとづく独自の分類と順序にて、広活用(ら変・四

段・な変」と狭活用(上一段・下二段・か変・さ変・上二段・下一段)があります。

		狭					広				
		⑨ 下一	⑧ 上二	⑦ さ変	⑥ か変	⑤ 下二	④ 上一	③ な変	② 四	① ら変	
	未然	え	い	え	お	え	い	あ	あ	あ	未然
	小止	え	い	い	い	え	い	い	い	い	小止
	原	える	う	う	う	う	いる	う	う	い	原
	連続	える	うる	うる	うる	うる	いる	うる	う	う	連続
	已然	えれ	うれ	うれ	うれ	うれ	いれ	うれ	え	え	已然
	命令	え	い	え	お	え	い	え	え	え	命令

活用の同行交段(交段が消えたものを含む)を「あいいうえお」にて示し、送り音韻「る」「れ」を付けました。送り音韻とは(活用や合成において音韻をはさみ前部から後部へ送るための音韻)です。(無語)の説明のところにすでに指摘してありますが、命令形の「活用語尾」に属するとされてきた「よ」は正しくは静辞「よ」であり、動詞に属しません。さらに、やまとことばの動詞は、「語幹」と「語尾」に分けるより、非活用部(無いこともある)と交段部(交段が消えたものもある)と送り部(無いこともある)に分けるべきでせう。活用型の番号は以下の説明にあわせて付しました。

上代の音段のあり方から、動詞の活用形と活用型の生成について予想した、松本克己氏の著(文献15参照)に学び、その結論のみをわたくしなりに整理します。交段部は音段のみにて示します。

①「あ(未然)」「い(小止・原)」「う(連続)」が生成。「あ(未然)」に強調関係詞「い」の合成した「あい」の短縮として「え(已然)」が生成。命令形ははじめ未然形を流用し「あ」だった。が、「い(小止)」に「あ」の合成した「いあ」の短縮として新しく「え(命令)」が生成。合成した「あ」は失はれた動詞「い(在)」「あ・い・い・う・え・あ」の古い命令形である。かうして、ら変型が生成。

②①の原形が「う」になり、四段が生成。

③②の連続形に「る」を送り「うる(連続)」が生成。「う」に「れ」を送り「うれ(已然)」が生成。かうして、な変型が生成。

④①の交段部をすべて「い」とし、原形・連続形に「る」を送り「いる(原・連続)」が生成、已然形に「れ」を送り「いれ(已然)」が生成。かうして、上一段が生成。

⑤②の「あ(未然)」に状態移行関係詞(ある状態への移行を表す関係詞)「い」の合成した「あい」の短縮として、「え(小止・原)」が生成。これを流用し「え(未然)」「え(命令)」が生成。③と同様「うる(連続)」「うれ(已然)」が生成。原形が「う」になり、下二段が生成。これの「え(小止)」は②の「あ(未然)」をもととしてをり、原形が同じで四段も下二段もある動詞の多いゆゑである。

⑥以上とは別系統として、「お(未然)」「い(小止・原)」「う(連続)」が生成。命令形

は未然形を流用し「お」。③と同様「うる(連続)」「うれ(已然)」が生成。原形が「う」になり、か変型が生成。

⑦さ変は旧くはか変型であつたが、「お(未然)」「お(命令)」が「え(未然)」「え(命令)」に転化した。

⑧⑥の「お(未然)」に状態移行関係詞「い」の合成した「おい」の短縮として、「い(小止・原)」が生成。これを流用し「い(未然)」「い(命令)」が生成。③と同様「うる(連続)」「うれ(已然)」が生成。原形が「う」になり、上二段が生成。

⑨ほとんど平安時代以後の生成だが、⑤の原形に「る」を送り「うる(原)」が生成。原形・連続形・已然形の交段部「う」をすべて「え」とし、下一段が生成。

活用形と活用型の生成史は、①「あ(未然)」と⑥「お(未然)」を起点としてゐます。合成の生成史も同傾向にあります。先述した合成表示の導入のところにて、交段合成の例として挙げた「ドおとる(劣)∥ドおつ(落)*ドる」。なぜ「お」段に交段するか。⑧にあたる上二段「おつ(落)」の小止形「おつ」は⑥にあたるか変型の未然形「おつ」をもととしてをり、それへもどつて動詞部「る」を合成するからです。しかし、この事実を優先して合成表示すると、生成史について認識のない人にはわかりにくいから、前部に原形を示す表示といたします。

なほ、送り部の「る」「れ」は、体詞「われ(我)」「ら」の「れ」や「ら」と同源の失はれた四段動詞「る」から原形・連続形・已然形の流用でありませう。

古代から現代へ動詞活用はかう変化しました。

ら変・な変が四段化した。下二段と上二段が消えた。消えた過程はさておき、結果としてほとんど、下二段動詞に下一段動詞「える(得)」が浸透合成した、上二段動詞に上一段動詞「ある(居)」が浸透合成した、といふ形式になつてゐます。例「ながれる(流)∥ながる(流)*える」「おちる(落)∥おつ(落)*ある」。狭活用の命令形にて「ろ」を送る形式も加つた。狭活用の未然形に「ト」断定「ト」意図か予想「ト」を接続するため「よ」を送る形式となつた。「よ」は送り音韻として動詞に属し動辭に属さないといふ見解)か変は原形に「る」を送り命令形に「こ」の強声「こい」も加つた。さ変は原形に「る」を送る形式も加つたほか、未然形に「あ・い」段も、命令形に「い」段も加るなど、多様化してゐます。漢語に接続するため四段活用に接近することまであります。例「ド愛^{アイ}ト^トす」。

古代動詞の善さも未来へどう活していきませうか。

静詞

静詞には活用静詞と無活用静詞とがあります。内容言語学の静詞といふ概念(←静的属性を反映する語)といふ概念)は、従来の「形容詞」といふ概念と異なります。

無活用静詞の例は、「しづか(静・閑)」「けなげ(健・勇)」「ほのぼの」などです。

活用静詞における活用は、実は、音行と音段が特定された一種類のみです。

く	小止
し	原
き	連続

さ行か行にわたる交段です。活用静詞の活用部を語尾、非活用部を語幹と呼びます。活用静詞の語幹もそのみにいて内容が自立した静詞として扱へます。

たとへば、「をし」(愛・惜)「うつくし」(美)などいはゆる「しく」活用は、「をし」「うつくし」などのみにてすでに自立した語幹であり、語尾は「く」(小止)「き」(連続)のみ、原形は語尾が必要ない、と考へられます。

静詞活用の生成史において、まづ無活用静詞に静詞部「し」があり、のちに抽象静詞「か(香)」が「き」「く」と活用して語尾となり、語尾原形には静詞部「し」を流用した、といふことかもしれません。静詞内容に未然も已然もありませんが、上代に「遠かば」「遠かども」といふ表現があり、活用生成における「か(香)」といふものが予想されます。また、「悲しけむ」「悲しけど」といふ表現もありますが、これは「悲しきむ」「悲しきど」からの流声であり、語尾「き」が生成してからの表現でせう。

活用静詞語幹と無活用静詞へは、次の詞または詞部などが合成されることが多いです。静詞「け(気)」または強声の「げ(気)」。これは抽象静詞「か(香)」から派生し、体詞「け(毛)」の内容とも関連した、やまことばの抽象静詞と考へられます。呉音漢語「気」とは偶然の類似でせう。ただし、「け・げ」にふさはしい漢字もやはり「気」です。次はまさに漢語ですが静詞「相」^{サウ}。

さらに、量を表す関係詞部「さ」。傾向を表す関係詞部「め」。実質を表す体詞部「み」。動詞「すぐ」(過)^{上二}。

従来たとへば、高「から」・高「かり」・高「かる」・高「けれ」・高「かれ」も「形容詞」の活用とされてゐます。実はこれは、静詞「たかし」(高)の小止形「たかく」と動詞「あり」の接続「たかくあり」の活用の短縮です。静詞でなく動詞「あり」の活用なのです。ただし、已然形のみは小止形「たかく」でなく連続形「たかき」と接続し高「けれ」です。「多し」において、「多けれど」(多きあれど)の「あれ」は動詞「あり」、(動詞へは連続形・動詞へは小止形)この区別が他の静詞においても意識されたのでせう。

活用静詞の活用が現代へは、連続形「高き」「美しき」などが「高い」「美しい」などと「い」音便し、それらが原形にも流用されるやうになりました。やまことばの音韻としてどこか格調低くなつたかもしれません。

動詞など

古代動詞について整理します。

従来、古代「助動詞」とされてきたものうち、まづ、やまことばらしい動詞「む」です。体詞「め」(目)と同源の失はれた四段動詞「む」から転化した動詞のやうです。内容は、(状況に対応しかう想定する)といふ念の表明でせう。想定動詞「む」です。やまことばの言霊思想は、(念を表す「こと」(言))呼吸と音声と音声言語が「こと」(事)に加勢する)といふものでせう。その中心にあつた古代動詞「む」です。(文献14参照)次に、動詞「けむ」です。内容から予想すると、「どけむ^{流声}↑きむ^{流声}↓^き」(来)*とむ」では

「ところが「かる(離)」と予想されます。

抽象体詞「く・体詞」「くち(口)・体詞」「こと(言・事)」、これらは派生関係にあるでせうか。動辞「む」に関し、言霊思想に言及しました。そこにやまとことばらしい長所があるとともに、それが直接に短所となる面も反省すべきでせう。すなはち、日本民族も西欧民族の実証精神に負けぬやう、「こと(言)」と「こと(事)」の区別をもしていくべし。

「まほし」。これは動辞「む」を含むが、全体は静詞です。「せまほし短縮↑むあくほし短縮↓とむ×タあく×せほし」。

欲求動辞「たし」。静詞型活用。たとへば「せねぶたし(眠)短縮↑ねぶりいたし短縮↓ねぶる(眠)×せいたし(甚)などの「たし」が動辞に転化。

推定動辞「らし」。活用型は、静詞活用生成の過渡期の残存。「らし」の「ら」は、「らむ」の「ら」と同様、失はれた四段動詞「る」が動辞化した未然形、と予想されます。ただし、内容は、不確定動辞「らむ」に対し、より確実な、推定動辞「らし」です。

追想動辞「き」。活用型は、静詞活用生成の過渡期の残存。「せば」は「しば」の流声。内容は、過去の追想または予想として記憶の状態を表明する。なほ、「句けらし流声↑きらし短縮↓とどきとどらし」。

断定動辞「あり」。ら変動詞「あり」が動辞化。「どけり短縮↑きあり短縮↓どく(来)×どあり」。「どなり短縮↓せに×どあり」。「どたり短縮↓せと×どあり」。「どたり短縮↓せて×どあり」。動辞「り」といふものは存在せず、動詞小止形(交段部が「い」段のもの)と動辞「あり」の接続における短縮が存在する。例「句あへり短縮↑あひあり短縮↓どあふ短縮とどあり」。以下は、動辞「あり」でなく、動詞「あり」と合成。「下なり短縮↑なあり短縮↓タね(音)×どあり」。「下めり短縮↑みあり短縮↓どみる(見)×どあり」。これらは、合成や接続の過程に立ち帰れば、内容を理解できます。一点、動辞「けり」は動辞「けむ」と同じく、動詞小止形「く(来)を含む。「けり」は〈ことがらが自分の認識にきた〉といふ内容でせう。着認断定動辞「けり」。記憶の状態を表明する、追想動辞「き」とは、内容において区別されます。また、「武蔵なる男、京なる女」の「なる」は動辞「なり」でなく、「せに短縮↓とどあり」、動詞「あり」の接続の短縮です。

客体的確認動辞「ぬ」。体詞「ね(音)」と同源の失はれたな変動詞「ぬ」から転化した動辞でせうか。内容は、〈前の語や句の客体的な内容を確認した〉といふ確認からの回帰を表す。

主体的確認動辞「つ」。体詞「て(手)」と同源の失はれた下二段動詞「つ」から転化した動辞でせうか。内容は、〈前の語や句の主体的な内容を確認した〉といふ確認からの回帰を表す。

否定動辞「ず」。上代の人間関係詞「な(己・汝)」と同源の失はれた・ら変型動詞「に」から転化した動辞に、動詞「す(為)」原形から音韻も概念も反転した無活用動辞「ず」、ふたつが混合した動辞でせうか。なほ、「ざり」などは、「どず短縮とどあり」といふ接続の短

これは、「動作主と動作対象の交換関係」に着目する英語などの「態」とは異質です。大
自然からおたがひの体内までの〈本然〉(物理必然性ないし生理必然性)に素朴に注意し
てみたやまとことばらしい「ある・あれる(生)」であると、再認識すべきです。

戦後、「敬語」を抑制しようとする向きもあり、たとへば「お調べになる」より「調べ
られる」が推奨され、それがいはゆる「受身」や「可能」の例と区別しにくく混乱も生
じてゐます。

「あれる(生)」とは別要因の現代語なのですが、「行く」に「得る」が浸透合成し「行
ける」。「くしてはいけない」の「いけ」はこの未然形です。同様、「見る」から「見れ
る」。「来る」への浸透は「暮れる」などとぶつかるから「来れる」。この「見れる」「来
れる」が「見られる」「来られる」の不当な短縮でないかと思はれ非難されてもゐます。
可能かどうかが多く問題となる現代、古代下二段動詞「う(得)」や英語動辞「can」など
の簡潔な表現がなくて、生じた現象でせうか。「見るはう?」「来るはうですか?」などとす
るのも一興?)

やまとことばの五音段のうちもつとも新しくできたのが「え」段のやうです。実に万
葉仮名のあり方からそのことが予想されるやうです。(文献15参照)このこともあつてか、
「え」段の強調や連続を好まないやまとことばの美観もあるやうです。(この美観からも
「見れる」「来れる」が批判されてゐるか。)逆に美しくない様子の表明として、現代民
衆語に(「だるい」から派生した?)静詞「でれでれ」もあるでせうか。

さて、動詞部「ある(生)」の前史にあつた「ゆ」「らゆ」の正体も、下二段の動詞から
転化した一動詞部「あゆ」であると、わたくしは考へます。動詞未然形への合成のあり
方や、動詞部内容も、「ある(生)」と同様です。(ただし、「尊敬」の意となることはない。)現
代に遺る例、下連続形あらゆる(所有||下あり)(有*下)あゆ、下連続形いはゆる(所謂||下いふ
言)*下あゆ。

さらに、「す」「さす」の正体も、下二段の動詞から転化した一動詞部「あす」である。
さうわたくしは考へます。下二段動詞「あす(浅・褪)」が記録にあります。が、「身みから水
や血などをしぼる」といふ内容の下二段動詞があり、それから転化した動詞部でせうか。(そ
の動詞の小止形から転化したのが体詞「あせ(汗)」でせうか。)動詞未然形に合成します。
例、下わらふ(笑)*下あす、下いづ(出)*下あす。広活用へは、あとの「あ」が消え、狭
活用へは、「あ」が「さ」となります。

動詞部「あす」の内容の本質は〈加勢〉である、と、わたくしは規定いたします。加勢
動詞部「あす」と呼びませう。合成する動詞内容の動的属性について、〈動的属性の実現
へ向けての加勢〉といふ客体を反映する。これが動詞部「あす」でせう。(現代は下一段
「える(得)」が浸透合成した形式の動詞部「あせる」)。

現代例。「使ひに行かせる」「雨を降らせる」「子どもを死なせる」「だれにでも使
はせる」「言はせておけば」「この発明がこの産業を發展させた」||「行く」「降る」
「死ぬ」「使ふ」「言ふ」「發展する」の実現へ向けての加勢。ただし、加勢のあり方
は多様です。

古代例。「のたまはせたる」「笑はせたまふ」「まゐらせたる」|| 上位の人の自身の「のたまふ」「笑ふ」「まゐる」の実現へ向けての加勢。上位の人がわざわざ加勢するといふ意味あひの「尊敬語」。

動詞部「あす」の前置に下二段活用の動詞部「しむ」がありました。動詞や動辞「あり」「なり」「たり（とあり）」の未然形に合成します。「(下)しむ||せし* (下)む」でせうか。語源は異質ですが、動詞部内容は「あす」と同様です。

さて、本然動詞部「ある(生)」から派生したやまとことばの基本語です。

カあはれ||ドあふ(会・合)* (下)マカある(生)

「あはれ」は、〈本然〉(物理必然性ないし生理必然性) にもとづく〈あふ(会・合)〉の自然生成〉といふ関係です。いろいろな場面にてその描写を通し自分や人びとの愛憐の情(文献13参照)を訴へたのが、たとへば紫式部の『源氏物語』でせうか。むろん、紫式部自身に先の「〈本然〉」といふ関係なる語内容分析はなかつたでせうが、当時の言語規範のままに〈本然〉と生活や人生の調和や不調和の情を表出したのでせう。

「ものあはれ」や「もののあはれ」の「もの」は抽象体詞です。いろいろな状況において関心の中心にある「もの」です。

なほ、『枕草子』にて有名な「をかし」は、

セをかし||ドをく(招)*セし

です。自身にとり招かれることか招かれざることかが関心の中心でせう。

さて、本論を公開してゐるJOMON^{縄文}あか데미サイト建築の動機は、わたくしの父・山田俊郎^{としを}が発明した次世代生命技術です。TQ技術と言ひます。(文献27参照) 空間の〈酵素活性場〉といふものを調整していく技術です。

父は農芸化学の実験の延長として無自覚に発見・発明・技術革新しただけなのだが、困つたことに、今までの世界の物理学や生理学の限界に接触してしまつたやうです。意外なことに、世界初の土器文化を創造したと考へられてゐる縄文人の当時としての先進性に、TQ技術の本質を説明する重要な鍵がある、と強く予想される。本論もその鍵を発見するためにこそ執筆してゐます。哀しいかな、明治維新以来のエリート層は自民族ややまとことばを卑下する傾向もあり、結果、わたくしは実にさまざまな文章をそれぞれ真剣に執筆・公開することに強く追ひ込まれてゐます。

わたくしは縄文人はじめ原始人のアニミズムの本質を、今までの物理学・生理学・民俗学・民族学とも調和するやう、〈酵素活性場の予感〉と規定いたしました。この内容が神道の生成史とも無関係でない、と考へます。本論は、やまとことばと日本語と日本民族についての認識を改善・改革・変革していく入門編です。直接の動機は、日英機械翻訳の研究でした。(文献25参照)

やまとことばの「かみ(神)」の概念は「八百万の神」^{やほよろづ}であり、一神教ではありません。語源はまだよくわからないやうですが、先の〈酵素活性場の予感〉といふ規定からすると、「タかみ(神)||遠近カか(彼)*タみ(身)」とも予想されます。自身の「み(身)」と同様の酵素活性が地表のいろいろな「か(彼)」にもある、といふ感性です。

ところで、秋のあの音を「かみなり(雷)」「神の鳴り」と呼び、あの光を「いなづま(稲妻)」「稲の連れあひ)、旧くは「いなづるび」(稲との交尾)と呼んだやまとことばの感性。たとへそこに迷信も含まれてみると、TQ技術の本質と無関係ではない、と想はれます。

ただし、縄文人にはかういふ地球表面観とともに宇宙観もありました。北極星と三日月と地表のへびに注意した鉛直水平観・死生観・雌雄観・繁殖観もありました。(文献20参照)

これらをも含め、わたくしどもは〈縄文るねっさんす〉をめざしてをります。

〈然意予感〉

世界(体内と体外と認識したい)には、客体面から主体面へ、とくに必然性から決意性へといふ、面ないし性格の移行があります。それを認識した人間の生理として、どういふ呼吸や音声や音韻を反映する傾向にあるか。それが地球表面の諸気候や諸生活において、諸言語の概念と音韻をどう発達させてゐるか。

わたくしはかういふ音声言語表現過程に、関心があります。まづは言霊思想ことだまもあるやまとことばについて、検討してをります。

ヨガの冥想により体内に注意しての予感ですが、〈必然性から決意性へ〉といふ認識内容をやまとことば人は「お↓え↓あ↓い↓う」といふ音段に表現する傾向にあるのであるか。(この予感を〈然意予感〉と呼びませう。)音行への表現も何らかの傾向があるかもしれない。むしろ、それとは別の流声・強声・短縮といふ音韻変化などを分けて観察すべきですが、語彙の生成史や活用の生成史を研究しつつ〈然意予感〉の正否を確認していきたいと考へます。気候・生活・呼吸・発音生理の現象・構造・本質を反省していくことも必要でせう。

一万年間の縄文時代は部族ごとに無数の方言があつたが、二千五百年前から農業などを輸入・改善するにつれ、日本列島内のある部族の方言に言語としての有益さがあり、それがまづは西日本にて次に東日本(青森あたりまで)にて普及し、統一のやまとことばが生成したのかもしれない。(文献16、21参照)

「さいはひ(幸)」と「わざはひ(禍・災)」。「さいはひ流声↑さきはひドさくキ(咲)×ド△セはひヒ(延)」と「セわざはひタわざ(態)*ド△セはひヒ(延)。「さく(咲)」が「はふ(延)」「必然性を祈り、それをさまたげる「わざ(態)」といふ決意性が「はふ(延)」ことのないやう、好い良い善い「わざ(技・業)」を追求し続ける。やまとことばはかういふ自然観・生活観ではないでせうか。

動詞の活用形と活用型の生成について、再び、交段部を音段のみにて示ませう。まづ未然形の「あ」があり、次に小止形・原形の「い」が生成し、次に連続形の「う」が生成したのでせうか。〈然意予感〉の「あ↓い↓う」、決意性への方向です。「あり(在・有)」「をり(居)」といふ世界と社会の基本動詞は、内容において少し静的属性にも近いためか、長く原形が「い」のら変として遺りました。動辞も含めて言へば、「女あり」「わ

れ猫なり。」から「女がある。」「吾輩は猫である。」へを近代化と言ふのでせうか。逆に「決意性のう」が強くなりすぎたとも感じます。他方、な変・下二段・上二段の連続形・已然形は「うる」「うれ」だったのが、な変は四段の「う」「え」・下二段は下一段の「える」「えれ」・上二段は上一段の「いる」「いれ」となったのが、近代化でした。〈然意予感〉の「え↓い↓う」からすると、決意性の後退でせうか。やまとことばの美観として古代動詞に棄てがたいものもあるとしたら、このあたりも一因かもしれません。たとへば「死ぬる」「死ぬれ」「流るる」「流るれ」「落つる」「落つれ」と「死ぬ」「死ぬ」「流れる」「流れれ」「落ちる」「落ちれ」。

「をく」を新かなにて「おく」とすると一種の封印もあるのでないかと、既述してあります。たとへば「をどる(跳・躍・踊)」はすなはち「うおどる」であり、そこに「決意性のう」の浸透もありませう。逆に「必然性のお」については、たとへば動詞「かふ(交)」の結果として体詞「かほ(顔)」があるのでせうか。

すでに江戸時代から指摘されてゐますが、やまとことばのかず関係詞に興味深い同行交段があります。しかもそれは〈然意予感〉の「お↓あ↓い↓う」の順です。「ひと(一)」の二倍は「ふた(二)」、「み(三)」の二倍は「む(六)」、「よ(四)」の二倍は「や(八)」。

偶然でせうか。まだささやかな例示しかできませんが、感性におぼれることなく、〈然意予感〉といふ仮定の正否を謙虚に確認してまゐります。

〈連綿語〉

現代において、いはゆる「敬語」の発達(伝統と創造)をどう考へるべきか。奈良・平安時代の律令制や大日本帝国の思想統制などはこれからの日本民族と日本国にふさはしくありません。世界人民は健康平和生活を追求する権利において平等です。とともに、世界資本制社会の問題を解決していく立場においても、健康平和な現実認識の学問・規範・芸術・保健・諸技能の発達(伝統と創造)において、先達と学徒、あるいは先生と後生コウセイの区別があります。ただし、おたがひに分野が異れば先達と学徒、あるいは先生と後生の関係が逆であることもあります。根本の平等を承知した上において、おたがひに発達(伝統と創造)の連綿を促進しあふ意味において、やまとことばないし日本語のいはゆる「敬語」を〈連綿語〉と呼び直してはどうでせうか。『論語』に「後生おそ畏るべし。」とありますが、先達を学徒は、先生を後生は超えてほしいとの願ひを込めての〈連綿語〉です。〈連綿語〉はもともと関係詞・体詞などより動詞・動辞などにて人間関係を示すといふ旧い類型の言語の特殊性であり、敬意はそれに付随したものです。

分野が異れば関係が逆であることもあると承知した上において、先達あるいは先生を上位、学徒あるいは後生を下位と規定します。〈連綿語〉には敬意表明と上位表明と下位表明があります。なほ、言語には〈連綿語〉を離れた学問記述などや、敬意や上位下位より休養や情念融和の、いはば同意語もあります。

敬意表明。いはゆる「丁寧語」ですが、〈連綿語〉のうち直接に敬意を表すのはこれの

みなので、かう呼びたいです。言語理解者が言語表現者に対し上位であるとき、言語表現の内容に関係なく、上位の言語理解者に対し直接に敬意を表す動辞や句です。意志敬動辞「ます」・断定敬動辞「ます」・断定敬動辞「です」・句「ごさいます短縮↑ゴザあります短縮」(「御ゴ*座ザ十トあり十トます」のみです。例「あの野郎がやりやがつたんです。」(「連綿語」全般については文献10断定参照。本論の例文も同著のものを借用。)

上位表明。言語表現の内容の人が、言語表現者に対し上位であるとき、上位であることを表すやう、内容の人やその人のものや動作などについて、特定の詞部を合成したり、特定の語句を用ゐる。いはゆる「尊敬語」ですが、上位といふ関係を表す詞部や語句の知識であり、敬意はあるとしても間接的です。また、言語理解者が言語表現者に対し上位か下位かは無関係です。例「社長が来週うちにおいでになるよ。」

下位表明。言語表現の内容の人どうしに上位下位の関係があるとき、下位の人やその人のものや動作などについて、下位であることを表すやう、特定の詞部を合成したり、特定の語句を用ゐる。いはゆる「謙譲語」ですが、内容の人たちが言語表現者や言語理解者に対し上位か下位かは関係なく、敬意とは別です。(言語表現者や言語理解者が直接に内容の人たちであることはある。)下位といふ関係を表す詞部や語句の知識。例「校長先生が児童に)そのノート、担任の先生からいただいたの?」

宇宙の太陽系の地球表面の日本列島などにて生かさせていただきますわれわれ。人間の認識の認識発達(体内認識と体外認識と認識反省の発達)において日本民族の認識発達(体内認識と体外認識と認識反省の発達)はどう位置づけられますか。

親鸞(1173～1262)と道元(1200～1253)と日蓮(1222～1282)は、鎌倉時代において、やまとことばの世界観から、輸入されてゐた仏教を改善した代表であると、わたくしは考へます。それぞれ「他力」と禪定と「自力」といふ面を分担した。宗派争ひは無意義であり、認識の役割分担にすぎないと、わたくしは考へます。

やまとことばの現代において、

必然想定動辞「べし」と敬意表明の「です」「ます」が、道元の禪定を、

本然動詞部「ある(ある)」と上位表明の「おくになる」が、親鸞の「他力」を、

加勢動詞部「あす(あせる)」と下位表明の「おくす(する)」が、日蓮の「自力」を、それぞれ反映してゐると、わたくしは考へます。

今の人間社会において解脱ゲダツと求道グダウについて言へば、既存の政治・金融・生産体制についての「有効」需要から解脱し人間社会を健康平和化するといふ〈潜在理想〉需要を求道する。さうして既存の生産・金融・政治体制をほしいに改善・改革・変革していく。これがわたくしの認識です。

言語と貨幣といふ人間社会の媒介を改善・改革・変革していかない限り、人間社会は本質的には改善・改革・変革されません。そして21世紀は、やまとことばないし日本語が英語から自立していくべき時期です。16世紀に、英語がラテン語から自立したごとく。

和歌の世界観

古代語規範による音数律などはあきらめざるをえませんが、やまとことばの世界観のひとつの象徴として、以下、小倉百人一首のわたくしによる現代語訳です。現代社会といふ場面へ現代語の規範と韻律により和歌集のなるべく深い内容を表現しようとしたまうひとつの短詩集でせうか。あるいは素朴な仲間うちの古代語と実証精神の現代語の調和への試みでもあります。わたくしの古代語規範認識にもとづき原歌の語・語順・音韻・言外の事情をなるべく主体的に活します。原歌に薄い距離もおく観察的訳を超える試みです。(各首末に歌番号を付しました。ふりがなは音読みもひらがなにしました。)

天空といふ野原に今ふりむきころろ放けますやう見ますと大昔の旅立ちの遠い遠い春日の地にありました三笠山からあらはれた月のそこにあるのかもと思ひは重なります」

瀬戸内海から隠岐へわたる海原へ八十もの島じまをめがけてわれはつひに漕ぎ出したと京にゐる大切な人らには告げよたまたまはりにゐる海人つまり漁師の釣舟たちよ 二

立ち別れ往なばつまり去りますなら赴任地の因幡の山の峰に生ひ茂る松ありもしもあなたが待つなどと聞きましたらすぐにも帰つて来ませう 16

由良の水流の激しい門を渡る小舟の人が舟を操るかちを絶やし舟の行く方も知りえない同じやう行く方も知りえないわたしの恋のこれからの道ですな 46

大江山を越え生野を行く道の遠いことですからまだ踏みまこともころろみない天の橋立でしてそこにある母からの文もまだ見てをりませんからわたしは母に頼りません 60

高砂のはるか遠い山の峰の桜が咲きましたよあれをそのまま望むためこちらの里に近い山の霞は立たずにゐてほしいよ 73

老境の今誰を親しく知る人にしよう高砂の長寿のしるしの松と親しくしようかそれも昔のわたしの友ではないころろなごむわけではない 34

来ない人を待つ松帆の浦の夕風ぎはしづかです今ここにて焼いてをります塩づくりの海藻のやうでせうかわが身も待ち焼きこがれてをります 97

淡路島からかよふ千鳥のもの寂しく慕ふやう鳴く声にいく夜も寝覚めたさういふ昔の関守も想像されます冬の旅の須磨の浜 78

有馬山近くの猪名の笹原にてわびしく風が吹いてゐますそよそよそよさあそれよそれですよ心変わりしかけてゐるのはあなたのはうわびしく待つわたしが大切な人を忘れることなどありませうか

58

あなたとの道ならぬ恋が世間にもれ思ひ侘び尽しましたが破綻の今はもう同じこと難波潟に水路を示す杭の漣 標あり身を尽してもあなたをめぐし逢はうとこそ思ひます 20

難波の入り江の芦の刈り根のみじかい一節あり仮り寝の一夜のみ旅人の相手をした遊女ゆゑに海をわたるめじるし漣 標もあり身を尽してやその人を恋ひわたるべきことのあるかも 88

難波潟の荒涼の水面にも映る芦たちのみじかい節と節の間を節と言ひ節のやうほんのみじかい間もあなたに逢へずにこの世を過ぎてしまひなさいよなどと言はれますか 19

住の江の松の美しい岸に寄り波あり夜さへもあなたを待つここへあなたのかよふ路のうち夢の路さへにてもあなたは人目を避けられ寄せられませんのでせうか 18

聞えませ高師の浜のあだな浮ついた高い波の音のやうなおころのお噂その波はわたくしの袖とところにかけるのをよませう浮ついた波ゆゑ涙にもぬれてしまふから 72

お前もわれももろともに生きる深さを思へ大峰の山 桜よお前といふ花よりほかにわが修行のころろを知る人もここにはゐない 66

いとしい吉野の山からの秋風ありさつと夜もふけて古い都でしたふもとの里は寒く冷たい空気に
冴える音あり冬に備へ女性が衣を手入れする砧を打つ音 94

朝がほのぼのと明るげです月が空にまだ有るのかと見あやまりますまでにしづかに光るものあり
ます吉野の里にふりつもつてをります白雪 31

春もすぎ夏が来たらしいです昔は白い妙なる布の衣を干したといふ天からおりたといふ香具山
の緑です 2

人の心といふものはいざ知らずふるさとのやうな初瀬のここは梅の花こそは移ろはず昔の香のま
まに美しく咲いてゐますね 35

うまうまいかないあの人との恋が良く果されたいと初瀬観音にまありでもあたりの風の山おろしさ
んよお前さんのやう恋がはげしくすさめとは祈りはしなかつたはずなのに 74

嵐の吹き荒れる三室の山のもみぢ葉は乱れ散りそれが龍田の川にては錦 織のやうしづかに美
しいまとまりでございました 69

霊の勢ひの神の代にもかういふことは聞きません龍田姫の住むほとりの川が流れます紅葉によ
り唐の紅の美しさに水のあちこちをくくりしぼり絹のやう染めますとは 17

このたびの旅は安心を祈る幣などとり出せません幣を手向けます手向山にあるこの紅葉の美しさ
こそは錦 織の幣にまさりますこれを旅を守る神のおこころのままにうづ 24

古都のみかの原のうちを分けて湧きて流れます泉 川ありいつ見たあなただからかかうも泉の湧
くやう恋しいのでせう 27

朝がほのぼのと明るげです宇治の冬の立ちこめた川霧もしいとぎれとぎれと晴れましてあら
はれわたりましたのは浅瀬浅瀬に鮎の稚魚を捕る風物のしかけ網代木です 64

わが庵は都の辰巳方面つまり東南にありしつかりと住みましてをりますといふのにそこは鹿も
棲むやうな世を憂しと逃げ込む宇治山なのでせうとか人は言はれまますさうな 8

すぎざりました昔の奈良の都らしい八重桜までも今日の九重の門の宮中に美しく咲き榮えてを
りますことひす 61

ひさしい天空からの光ののどかな春の日ですでもしづかなこころもないから桜の花は散るのでせ
う 33

ひろく見渡す海原に漕ぎ出してみましたらひさしい天空に白い雲の居るのかと見まがふやうはる
か沖に白波がうねりました 76

夏のはじめに待つほととぎすがやうやく鳴いてくれたからその声の方をすつとながめましたただ
夜明けの空に残る月のみがそこにありました 81

夏の夜はまだ深くふけない宵のつもりがまう明けてしまつたのを受け思ふ夜明けに動きの追ひつ
かないといふ月がまだ雲のいづこにか宿つてゐないだらうか 36

吹きわたる秋風に天空の棚のやう水平に流れゆく雲ありその雲ふと絶えますをりのみ切れ間より
もれ出でます月の影の清く澄みきるさま 79

木や草の白く光る露に風の吹きしきります秋の野は緒にてひもにてつらぬきとめない真珠それの
乱れ散つてゐるやうでした 37

それが吹くとたちまち秋の草木らみなしをれてしまひますわかりましたすなはちこれ山の風と書
く嵐の荒しでせう 22

にはかにふり去りました村雨の露もまだ干あがりません立派な緑の真木の葉に深山の土から天へ
冷たい霧のしづかにさびしく立ちのぼります秋の夕暮れ 87

まどふ心をふりあて折るなら折りませうか上に初霜の白の置かれましたから美しい区分けのどこ
にかわれをまどはしてゐます清い白菊の花 29

天の川に鳥のかさぎぎたちが翼をつらねて渡した橋といふ伝説あり冬の天の川のもと宮中の橋
つまり御階といふ階段に置かれました霜の美しく白いのをみまして夜が凜と冷たくふけてゐたと氣

づきました 9

桜のやうな色香は移りすぎましたねなんとなくわが身が世にふりすぎし世をながめつつあるあひまに長い雨もふりつづいたかのやう 9

桜の花を誘ひ散す山の嵐吹くきらびやかな庭だが雪舞ふやう花降りゆくのでなく古りゆくものは髪が雪に似るわが身なのだった 96

世の中は常に変らずにあつてほしいなあ渚を漕ぐ海人つまり漁師の小舟が浜辺からも綱にて引かれるその綱に何だかとてもこころのひかれますこと 93

嘆けと月はわれに情実のものの思ひをさせるのか何ゆゑかもの思ひを美しい月にかこつけたくなる顔のわが涙のありますこと 86

なつかしい友にめぐりあひまして見つめましてその友だとも確かにわからないあひまに友の姿は隠れましためぐりあひましたのにふと雲に隠れてしまひました夜ふけの月とも競ふやう 57

月をみつめるとあれこれのものが千々に悲しいですわが身一つに來た秋ではありませんけれど月をみつめるわが身一つにある千々の悲しみ 23

夏に八重にも葎つまりつるの雑草の茂つてしまつた昔は風雅な邸宅だつたこの荒れ宿のさびしいところに今は人など來るのは見えないでも昔と変らず秋といふさびしい季節は來ましたな 47

こほろぎもわびしく鳴いてゐるよ霜の夜のこの寒いむしろにわが衣の袖を敷いてやる人もをりませんからひとりにて寝ませうか 91

奥山に散りつる紅葉を踏みわけつつ雄から雌をもとめましてか鳴く鹿のその声をききますときに秋はそして人生も悲しく感じます 5

世の中よ安心の道こそもないではないか思ひを入れ入つてみた山の奥にも雄から雌をもとめてか鹿の鳴く悲しい声まで聞えてしまふ 83

さびしさに不安なところをなぐさめようと宿を立ち出でましてながめましたらまはりはいづこも同じさびしさでした山里の秋の夕暮れ 70

山里といふものは冬こそさびしさのまさるものでしたね訪ねます人目も離れ草も枯れてしまつたと気づきまして 28

君のため新春の野に出かけましておいしく食べて薬になる緑の若菜をつみましたわたしの衣の袖に白い雪も降つてをりましたよ 15

風のそよそよと檜の葉に音を立てます檜の小川の夕暮れはすでに秋の清涼ここの神社の半年の穢れを祓ふ禊ぎのみが夏の証でしたな 98

夕方ともなれば門前の田の稲葉に波うたせさはさはの音もつれて芦ぶきのこの山荘にも快く涼しい秋風それが吹きわたつてくる 71

秋の稲田にて刈り穂のため飯庵つまり小屋をつくり屋根を葺くわびしい苦といふむしろを粗く編みましたからわたしの衣の袖は寒く夜露にぬれていきますなあ 1

天空の風よ雲のうちにある天地をかよふ路を吹きとばし閉ぢてしまへこの新嘗祭の乙女らの華麗な舞ひ姿をまうしばしとどめておかう天女のやうすぐ天に帰らないやう 12

深くない瀬をはやく流れますから岩にせきかけられます滝のやうな川のやうわかたれたあともつひに出会ひますとの思ひはあります 77

風がはなはだしく吹きつけるから岩といふ動じない相手に強くうちあたる波のやうおのれのはうのみが心の波のくだけ散り恋のものの思ひに苦しむこのころです 48

恋に思ふわが袖は潮の干りましても見えぬ沖の底にある石の人にまったく知られず海水につかるやう涙にかわく間もございません 92

険しい山のうちにある山鳥の雄の尾の下に垂れました尾の長い長いこと雌と離れまして寝る習性らしい長い長い秋の夜をこのわたしもひとりにて寝ませうか 3

宮中の諸門を守る御垣守すなはち護衛の兵士のたくかがり火の夜の闇にはパチパチと赤々と燃え

あがり昼はむなしく消えるをくりかへすそのやうななぜか夜と昼が別人のやうわれは恋のものの思ひをつづける 49

逢ひましてさあ寝ますと名にあるなら逢坂山のさねかづらといふつる草さんに知られずあの方のもとにつるのやうたぐり忍びくるすべもあればなあ 25

夜であることをおしこめかくし（にほとり）鶏（せき）のそらぞらしい鳴きまね声にてわたしをたばかられましても函谷関の故事と異り世にも逢坂関のはうは逢ふことをせきとめ許しませんでせう 62

それはみじかい春の夜の夢ばかりでせう手枕のためたはむれに差し入れられたあなたの甘美な腕（かひな）から効なく立たうわたくしの浮き名こそを惜しく想ひます 67

知られないやう忍びましたのに顔色に出してしまつてをりましたよわが恋は何かもの思ひされておますかと人から問はれますまでに 40

恋してゐるといふわたしの噂（うはさ）はまうはや立つておましたよ人に知れないやう恋の思ひをはじめましたばかりなのに 41

浅芽草生える野の細い竹の葉のさやぐ篠原のうちに忍ぶそのやう忍びましたのにまうありあまりてなにゆゑあなたといふ人のかうも恋しいか 39

逢ひ見まして契りを結びましたのちのこのあなたへの何とも切ない心に比べましたらその前はまう昔です何もものなど思つてあませんやうでしたね 43

明けたら暮れるまたお逢ひできるとは知りましてもさうながらもなほうらめしいのは長い雪の夜からいつたんお別れへのしるしほのぼのと明るげな朝です 52

君に逢ふためなら惜しくはありませんでしたこの命さへお逢ひを遂げた今はさらに長くもあればなあと思つてをりましたです 50

あなたと長く続くであらうと言はれるおこころも確かには知りえませんが昨夜のわが長き黒髪がこのやう乱れてゐる今朝はふともの思ひの乱れてをりますこと 80

あなたを忘れることはないと言つてくださるお言葉の行く行く末までは頼みにしがたく存じますからお言葉をくださった喜びの今日を限りの命でよいかとも思はれます 54

恋が禁じられました今はただあなたへの思ひを絶やしますとすることばかりを人づてでなくあなたにぢかに申し上げます道もあればなと思ふばかりです 63

そもそも逢ふといふことの絶えてまったくないならなにやかやと相手の人をもわが身をも恨むことなどないでせうになあ 44

あの人を恨み悲しみ涙を干さず朽ちさうな袖こそ惜しいましてこんな半端な恋に朽ちてしまふだらうわたくしの浮き名がなほ惜しい 65

夜通しひとりにてもの思ひするしかないこのごろはなかなか夜が明けやらす人でなく光もささない闇のひまつまり寢室のすき間までつれなく感じます 85

夜明けの空にまだ有る月もつれなく見えたあの人がつれなく見えて別れたあとの月だあれより暁（あかつき）つまり夜明け前ほどの憂いものはない 30

今すぐ来るとあの人には言はれましたのにそればかりに長月の長い夜をただただ待ちあの方でなく夜明けに残る月と出会ふのをふつうなら男の方が来て帰られるころのそれを待つこととなりました 21

あなたが期待させねばですなためらはないで寝てゐたものを夜はふけて西にかたむくまで月を見つめましたことです 59

嘆いては嘆いてはひとりにて寝る夜の明けるまでの間はいかに長い長いものと苦しむかそれはご存じですか 53

お気の毒ですなとも言つてくれさうな人は思ひ浮ばずあなたにかうしてむなしく思ひこがれつわが身はむなしい人生を終へるのでせうね 45

忘れ去られたこの身のこととはどうとも思ひませんが忘れませんと神に誓つたからあの方は命を落

すことになるそれがまあ惜しいとも思ひこころから離れません 38

わが命の魂をつなぐ緒よ絶えてしまふなら絶えてしまへわれ生きながらへますならこの恋を忍びますことの弱り秘めきれないこともあるから 89

まうをりませんでせうこの世にはほかの世へ行く思ひ出にこそ今ひとたびのみお逢ひくださることもありますればなども 56

恋などに思ひ悩み苦しむそれでも命といふものは耐へてあるがものごとのかなはぬ運命の憂ひに耐へられずこぼれてしまふのが涙といふものです 82

われにまともな中身もないが苦しみ悩む憂き世の民に覆ひかけますかな開祖のやうわれも立つ袖つまり比叡山に住み初めた墨染の衣の袖を仏の慈悲への道を 95

この先長く生きながらへたとときに思ひ通りでないこのごろもまた偲ばれるのでせうね昔に憂ひに満ちたとみえた世こそ今は恋しいのですから 84

滝の音は絶えて久しくなりましたけれど名こそは昔のその滝の名声こそは流れてなほ聞えてをりますなあ 55

小倉山の峰のみち葉よ人のやうな心のあるならこのたびの上皇に次ぎ今ひとたびの天皇の行幸のあるまでこの美しさのまま待つこともせよ 26

息子のことで契りおきくださいましたもぐさとなるさせも草におく露つまり燃える頼みにおこたへくださる恵みのお言葉の露を命としつつなぜか今年の秋もまた去るやうに見えお言葉もはかない露のやうでございます 75

わが心にもなくこの憂き世に生きながらへたときとても恋しく思ひ出すであらうわが病む目にも美しいこの冬の夜ふけのありがたい月 68

人をもいとしくもあり人をも恨めしくもありうまいあたりあひつきあひなく世の治めを思ふゆゑにももの苦しく思ふわが身には 99

ああ百敷つまり宮中よその古き軒端に忍草まで生え荒れてゐるではないか偲ぼうにもなほ偲べませんのは繁栄の昔ですな 100

これこそは東国へ行きますも京へ帰りますもふと別れたりしまして知りますも知りませんもふと逢ひたりしまして人生縮図の逢坂の関 10

志賀への山の中の川にせきとめのための柵を風がふはりとかけましたやう見えたのは流れようにもあひ流れません美しい紅葉のあつまりでしたよ 32

できませうかかうまでだとあなたに言ふこと伊吹山のもぐさとなるさしも草ありさうとしもあなたは知られませんでせうもぐさの燃えますやうなあなたへのわたしの火のやうな思ひを 51

田子の浦にうち進み出てひろく高く眺めますと白く妙なる情景あの富士の高嶺にて雪はふりしきるのでせう 4

若い男と女の歌垣のあつた筑波嶺のその峰よりの細い流れが落ちつつやがて深いたまりの淵となる男女川ありあなたへのわが恋もいつのまにかたまりつもりその淵のやうになつてしまひました 13

遠い陸奥からの信夫縋りといふ忍草の汁の乱れて染めた衣があります誰ゆゑにわたしは忍びの恋などに乱れ初めたかわたしからのゆゑでありますのに 14

契りましたよねおたがひ悦びの涙の袖をしぼりつつです末の松山を波が越すやうなそんなありえないこころ変りといふものはないよ 42

見せませうかわが袖を美しい雄島の海人つまり漁師の袖さへ海水にぬれにぬれましてもその色は変らないわが袖の血の涙の色には 90

桜のやうに散りゆく貴族文化の何たるかを遺さうとした藤原定家の想ひは、かるた遊

びの形式にて今日まで受け継がれました。今あらためてその世界観を現代語にて確認してみました。社会は三十一文字みそひとモジにをさまりきらぬほど複雑化してゐるとも感じますが五七五七七や五七五に美しくをさまつてゐたやまとことばの先達らの世界観と言語規範。その生理と素朴美こそは世界資本制社会にありひと息を生き続けます一服の安心ではないでせうか。訳後のわたくしの想ひ…、健康平和社会を偲び忍ぶわれ死ぬるまで。

〔文献〕本論を構築するため以下の文献を中心に参考としました。（「アソシエートした知性」へ向けて）

- 1 時枝誠記『国語学原論(上)(下)』(岩波文庫 2007)
- 2 三浦つとむ『認識と言語の理論 第一・二・三部』(勁草書房 1967～1972)
- 3 三浦つとむ『日本語の文法』(勁草書房 1975)
- 4 三浦つとむ『日本語はどういう言語か』(講談社学術文庫 1976)
- 5 三浦つとむ『「ころ」とことば』(季節社 1977)
- 6 三浦つとむ『現実の世界と観念の世界対応の過程的構造についての吟味』三浦つとむ『生きる・学ぶ』(季節社 1982) 所収
- 7 今井幹夫『あなたとわたしの日本語ことばの構造と表現』(社会評論社 1986)
- 8 吉本隆明『詩人・評論家・作家のための言語論』(メタローグ 1999)
- 9 吉本隆明『改訂新版言語にとつて美とはなにか I・II』(角川文庫 1982)
- 10 萩野貞樹『ほんとうの敬語』(PHP新書 2005)
- 11 萩野貞樹『旧かなづかひで書く日本語』(幻冬舎新書 2007)
- 12 中西 進『ひらがなでよめばわかる日本語』(新潮文庫 2008)
- 13 山崎良幸『「あはれ」と「もののあはれ」の研究特に源氏物語における』(風間書房 1986)
- 14 和田明美『古代日本語の助動詞の研究「む」の系統を中心とする』(風間書房 1994)
- 15 松本克己『古代日本語母音論上代特殊仮名遣の再解釈』(ひつじ書房 1995)
- 16 松本克己『世界言語のなかの日本語日本語系統論の新たな地平』(三省堂 2007)
- 17 鈴木日出男・出口慎一・依田 泰『原色小倉百人一首朗詠CDつき』(文英堂 2012)
- 18 教学社編集部編『風呂で覚える百人一首』(教学社 1993)
- 19 栗田 勇、ロバート・ミンツァー (FUJITSU ユニバーシティ企画)『雪月花の心 Japanese Identity』(祥伝社新書 2008)
- 20 齋藤守弘『国宝土偶『縄文ビーナス』を解説する』NPO法人国際縄文学協会第3回縄文未
来塾発表文書 2013.5.17.
- 21 寺沢 薫『日本の歴史02王権誕生』(講談社学術文庫 2008)
- 22 沖 正弘『生きている宗教の発見だれでも悟り救われる沖ヨガ修行法』(竹井出版 1985)
- 23 沖 正弘『ヨガ総合健康法沖ヨガの考え方と修行法(上)』(地産出版 1976)
- 24 沖 正弘『なぜヨガで病気が治るのかヨガ総合健康法(中)』(地産出版 1977)
- 拙論 (JOMONあかでみいサイト「理念集」画面内)
- 25 「人間と通信の要点」「日本民族紹介と日英翻訳機械」「対象と言語」
- 26 〈健康生活への道〉「生物系と個人」
- 拙文 (同「店頭」画面内)
- 27 「TQ技術」案内」「TQ事業協会の根本方針」